

武蔵野台地で躍動した新水車^{しんぐるま}

日本の原風景

「渋谷の通を野に出ると、駒場に通ずる大きな路が檜林について曲っていて、向うに野川^{のがわ}のうねうねと田圃の中を流れているのが見え、水車が頻りに動いているのが見えた。地平線は鮮やかに晴れて、武蔵野に特有な林を持った低い丘がそれからそれへと続いて眺められた」・・・渋谷近くに住んでいた国木田独歩を、田山花袋が初めて訪ねた頃の牧歌的ともいえる武蔵野台地の風景を描写したものです（田山花袋「東京の三十年・丘の上の家」明治二十九年初版）。

ビルと人の群れで溢れる現在の渋谷とはまるで異なった、武蔵野という名に相応しい緑豊かな丘陵だったのでしょう。田山花袋が描写しているように、当時の多摩川や神田川（支流の河川も含めて）には数多くの水車（明治三十年。七百十台）が稼働していて米を搗き、コムギやソバの製粉をしていました。人口百万人を超える大都市・江戸↓東京の胃袋を支える裏方を務めていたのです。

四百数十年前、徳川家康が駿府から江戸へ入府して最初に取りかかったのは、江戸城と城下への水の確保でした。そのために先ず着手したのが、井の頭池^{いのかしらいけ}を起点とする「神田上水」と、多摩川からの「玉川上水」の開削でした。これによって、武蔵野台地は潤沢な水資源に恵まれることになり、やがてソバ・コムギ等の

多くがこの武蔵野台地で生産されるようになったのです。そして次第にこれらの河川には水車みずぐるまが設置されるようになり精米や製粉を業とする農民が増加してきました。人力より河川の流水を動力源にする方が遥かに効率的であることは説明するまでもないでしょう。水車には搗き臼と磨り臼に加え篩い等の装置も備えられ精米・製粉が行われていたのです。江戸市中に勃興せんとしていた外食産業への供給を行う役割を果たすことになった訳です。

関係図書を紐解いてみますと、中国大陸で発達していた水車が朝鮮半島を経て「碾磑てんがい」という名で日本へ伝来したのが推古天皇の十八年（六一〇年）だといえますからずいぶん古い話です。

その後、水車は人力に代わる貴重な動力源として多様な用途に活用されるようになるのですが、大きくは田圃などへ水を運ぶための「揚水用」と精米やソバ・コムギ等の製粉のように加工を目的とした「動力用」に分けられます。

動力用としては、精米・製粉と並んで一般家庭の灯火用を使う「菜種油・綿実油」が大量に絞られようになり、精米も量と共に質も飛躍的に向上して、伊丹の清酒（それまでは「濁り酒」）が誕生することになったのです。「下り酒」と呼ばれ遠く江戸まで運ばれ爆発的な人気を呼んだことは周知のことです。

製糸・撚糸・製糖や火薬の生産にまで水車は多様な範囲で活用されてきましたが、水車が精米・製粉等の農事に主に使われたのは幕末頃から明治・大正・昭

和初期までの約百年間であったと思われれます。

参考までに、昭和十七年の統計によると全国で稼働していた農事用の水車数は七万八千四百八十二台に及んだとあります。

戦後は急速に電力への転換が進んだために、水車は減少の一途を辿りました。

現在、原型を完全に残している大型営業用水車は、東京・三鷹市大沢を流れる野川（多摩川の支流）に設置されている峰岸家の新水車（文化五年・一八〇八年新設）だけだといえます。昭和四十三年（一九六八年）頃まで百六十年もの永い間働き、そのままの姿で保存され公開されている貴重な民族文化資料です。平成六年に三鷹市、平成十年には東京都の有形民俗文化財に指定され、武蔵野の昔を語るシンボリックな存在といえましょう。

シンボルといえましょう一つあります。当時武蔵野には青梅街道沿いに製粉会社が多社ありましたが、転廃業が続く中で、石森製粉（株）ただ一社だけが今も健在で製粉業を続けています。同社は明治五年（一八七二年）に「吉野屋」の名で創業し、昭和十三年（一九三八年）に「石森製粉所」に改称して、今日までそば粉専門の製粉を百五十二年間も続けた日本屈指の老舗です。現在、工場は新木場に移されているのですが、元の中野・工場跡には「本社ビル」が建てられ、その玄関に大きな石臼が記念碑として置かれていて往時の名残りを留めています。

緑あふれる武蔵野台地を静かに流れる多摩川・神田川をはじめ多くの河川の

流れの中で、「コットン コットン」・・・心地よいリズムを刻みながら石臼で粉を挽く水車の姿は、武蔵野のみならず日本の原風景を語る上で、決して忘れてはならないもののひとつに違いありません。

次に掲げるのは、昭和二十五年にNHKラジオ歌謡（歌手・荒井恵子）に取り上げられ大ヒットした「水車の唄」です。

森の水車

緑の森の彼方から 陽気な唄が聞こえます

あれは水車のまわる音 耳をすましてお聞きなさい

コトコトコットン コトコトコットン

ファミレドシドレミア

コトコトコットン コトコトコットン

仕事にはげみましょう

コトコトコットン コトコトコットン

いつの日か 楽しい春がやって来る

昭和十七年に「清水みのる」作詞、「米山正夫」作曲、高峰秀子の歌でレコードが発売されたということですが、大ヒットしたのは昭和二十五年以降である

ことは先述の通りです。

この小文を書くための資料探しの過程で「森の水車」を見つけたのですが、遠い記憶の奥の奥に残っていたメロディーと「コトコトコットン ファミレドシ ドレミファ」の歌詞が決め手でした。

目まぐるしく変化する時代だからこそ、ひとつくらいは変わらない日本の原風景を心の中に刻み込んでおきたいものだ、とつくづく思いました。出来れば唄と共に・・・。